

生徒人権委員会フィールドワークに参加しました

昨年に続き今年も7月30日に、高田先生引率のもと人権委員3名が「中予地区生徒人権委員フィールドワーク」に参加しました。他校の人権委員と一緒にバスに乗り、岡山県にあるハンセン病療養施設「国立療養所長島愛生園」を訪ねました。

ハンセン病を取り巻く問題については、毎年人権デーで理解を呼び掛けたり、差別をなくすための学びの機会を設けたりしてきましたが、みなさんはハンセン病について、また、ハンセン病を取り巻く問題についてどれくらい興味関心や理解があるのでしょうか。

フィールドワークに参加した生徒と先生の感想を紹介します。

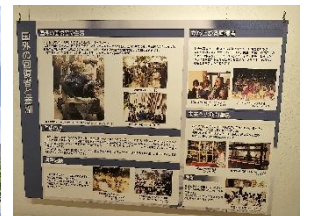
私は初めて愛生園に行きました。中学校の頃にハンセン病についての学習で香川にある大島青松園には行ったことがあったので、ハンセン病のことを少しは知ったうえで今回のフィールドワークに参加しました。同じハンセン病患者さんが隔離されていた所でも、施設によってこんなに違いがあるのかと驚きもたくさんありました。

私が一番驚いたのは、島から逃走した人を捕まえておく官房があるということです。実際に私も官房を外から見ました。外から見ただけでもわかる怖さがあり、実際に閉じ込められていた人の気持ちになると怖くて怖くてたまらないんだろうなと想像ができました。

私たちは実際に島で生活を送っていた中尾さんのお話を聞きました。その話を聞いていると、当時のハンセン病に対する偏見や差別がどれほど強かったかがわかってきました。当時だけではなく病気が完治している現在でさえ偏見や差別に苦しんでいる人は多くいると聞きました。その話を聞いて私は、これから生活していくうえで偏見や差別は完全にはなくならないのではと不安に思います。今はまだ差別があるというその現実は変わらないけれど、自分が学んだことをしっかり伝えていき、差別をなくしたいと思いました。また同じような悲劇が起きないよう私たちにできることをしっかりやって、悲劇を繰り返さないようにしていきたいです。（2年女子）



私はハンセン病のことは何となく知っていたけれど、愛生園は今回のフィールドワークを通して初めて知り、初めて行きました。フィールドワークでは、ハンセン病の後遺症がある方のお話を聞くことができました。ハンセン病患者の方が差別されていたことは知っていたけど、実体験談を聞くと、当時あった差別は私が思っていたものよりももっと過酷なものだったことがわかりました。他人だけでなく、家族からも差別されていたことを知った時は心が痛みました。



今回のフィールドワークを通して、差別される側の辛さや大変さを今まで以上に知ることができました。

（2年女子）

今年の研修会では、入所者である92歳の山下さんの講話を聞くことができた。この療養所の桟橋に着いたときのこと、療養所での青春時代など、直接お話を聞くことができ、また、生徒からの質問にも真摯に答えてくださった。特に印象に残った話は、山下さんが故郷へ里帰りをするとき、山下さんの家族も近所の人たちもいつも歓迎してくれていたが、山下さんの兄が結婚をすることになったとき突然、「兄弟の縁を切ってほしい。もう里帰りに来ないでほしい。」と言われたことだ。個人では差別の気持ちはなくても、「家」という枠が差別を生むことについて考えさせられた。



歴史館見学、山下さんの講話のあとに見る園内は、この場所で実際に入所者の生活があり、外の社会から断絶されることの悲しさ、消毒液の風呂に入る時の恐怖など、様々な感情がこの場所にあったことを私たちに感じさせた。

6年前の新型コロナ感染症拡大のときにも、各自治体では「ゼロコロナ政策」が行われ、感染することは悪だという風潮が広がり、感染者・医療従事者への差別があった。この問題は、ハンセン病療養者への差別から何も学んでいないと言える。未知の病気に対する恐れに対して、私たちは何ができるか考えていかなければならないと感じた。

（引率教諭）